

井伏鱒二全集

第十二卷

井伏鱒二全集

第十二卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第十二卷

昭和四十三年一月二十日發行

著者 井伏鱒二

發行者 竹之内靜雄

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七六五一(代表)

振替 東京 四一一二三

印刷 株式會社 精興社
製本 和田製本工業株式會社

目次

アブバカとの話	三
南航大概記	一〇
昭南日記	五
十七年七月下旬頃	七
ゲマスからクルーアンへ	七
昭南タイムズ發刊の頃	八
旅館・兵舎	九
或る少女の戦時日記	九
シンガポール所見	二七
魚 拓	二九
風貌・姿勢その二	三二
兎の仔	三三
かすみ	四
手紙のこと	五
鯢 っ り	六
悪 夢	三

コンブラ醬油瓶	九
かみなり	一〇一
ハイカラ釣のこと	一〇四
湯 西 川	一〇六
病中雜記	一〇
に ほ ひ	一一五
取材旅行	一二九
現代の埴輪づくり	一三〇
十月の日記	一三九
大山・升田三番勝負觀戰記	一六五
失 念 事	一八〇
岡	一八三
石臼の話	一八九
正宗さんのこと	一九二
ふるさとの音	一九九
亡友中村地平	四〇二

南方ぼけの頃	四二〇
中込君の釣	四一九
日記	四一五
イタドリ の 繪皿	四一八
尾崎士郎 の 諧謔	四二三
弘光寺 の 杉戸	四三六
野村万藏邸 の 能舞臺	四三八
廉塾	四四〇
壺井邸 の 籐の間	四四二
サ克蘭ボ	四四四
備前焼	四四五
伊豆松崎	四六〇
週間日記	四六九
築山	四七四
解題	四七七

井伏鱒二全集

第十二卷

猫

私のところでは猫を一びき飼つてゐる。十二年前に迷ひこんで来てそのままに居ついてゐる。そのころ鼠が出て困つたので、うちの者が知りあひのところでは子猫を一びき貰つて來ると、偶然にも同じその日に野良猫が迷ひこんで來た。

この迷ひ猫の方は三毛で身ごもつてゐた。貰つて來た方は生後一箇月くらゐの雄猫で、御目見得料として鯉節を三本つけられてゐた。私はどちらを飼ふか迷つたが、要は鼠を防ぐためだから三毛を飼ふことにして、子猫は鯉節と一緒に返しに行つた。

三毛は私のうちに居ついて二週間目か三週間目に六びき子を産んだ。子猫の目があいて暫くすると、鐵道關係の人がほしいと云ふので渡りに船と六びきともくれてやつた。その人は、静岡へ持つて行つて、一びき二百圓のキャッシュで賣つたと後日に云つてゐた。鐵道の方に關係しながら閨屋に似たこともしてゐたらしい。静岡は戰爭中に焼野原になつて猫までゐなくなつたので、當時ブラック街の人たちが鼠の害で困つてゐたさうだ。

子猫の始末がついて暫くすると、黒いチャボが迷ひこんで來た。まだ戦後のどさくさがをさまらない當時のことだから、鶏まで落着きがなかつたのだ。チャボは濡縁の下に入つて、巢についたやうにうづくまつてゐた。うちでは交番へ届けに行つた。近所のうちへも問ひあはせた。

「ひよつとしたら、西荻窪の齋藤さんのチャボかもしれないよ。」

私は家内に、齋藤さんのうちへ問合せの連絡をさせ、チャボをカナリヤの空籠に入れた。

齋藤さんのうちでは戦争中から黒いチャボのつがひを飼つてゐた。雌の方は奥さんによくついて、奥さんが買物に出かけようとする、コッココッコと鳴いて後を慕ふので、奥さんはそれを買物籠に入れて歩いてゐた。西荻窪から電車で荻窪へ買出しに來るときも、ついでに私のうちへ寄るときにも買物籠に黒いチャボを入れてゐた。よく馴れたチャボだから、人が林檎の黒い種を手の平にのせてやると、籠から首を伸ばして啄んだ。

奥さんの話では、空襲のとき奥さんたちが防空壕に逃げこむと、チャボも後をつけて逃げこんで來る。飛行機が來ると、敵機と味方機の區別なく、木の下にかくれて雄を呼びながら頭だけ隠してゐる。今が卵を産みごろの年齢だと云つてゐた。

戦後になつてからも、たまに奥さんは買物籠にチャボを入れて私のうちへ來ることがあつた。別に用があるわけではない。私の家内と女學校時代の同級で、齋藤さんとの間に子寶がないから暇つぶしに來るのである。あるひは奥さんが荻窪のどこかの店に寄つたとき、買物籠から逃げ出したチャボかもしれぬ。そんな風にも考へた。

私はチャボを入れた籠を茶の間の濡縁の上に置いた。ここは私のうちで一ばん陽當りのいい場所である。餌にはハコベをやつて林檎の食べ滓もやつた。人間も食糧に事を缺くころのことだから、人間の食べられないものをやることにした。ところがチャボは御飯の食べ残しよりも林檎の黒い種を好いた。それよりも林檎の酸っぱい芯のところを好いた。

家内は齋藤さんのうちから歸つて来て、がつかりしたやうに云つた。

「齋藤さんのうちのチャボは、大きな鹽のなかで卵を温めてゐました。雄の方が番兵になつて、鹽のわきに立つてゐるのです。しょんぼりとしたやうな番兵でした。」

「そりや戦争中から飼つてゐるんだから、産室を守る番兵としては老兵だらう。もう五歳か六歳になる筈だ。人間にすれば僕くらゐの年齢かね。」

動物事典を出して見たが、チャボの壽命については觸れてなかつた。

私は小鳥屋へチャボの餌を買ひに行つた。小鳥屋といつても、そのころはざる笊や籠など店に並べて内々で粉米なんか賣つてゐた。私は粉米を買つて、小鳥屋の主人にチャボの壽命について聞いてみた。普通、チャボは十年ぐらゐで老いぼれるが、うまく壽命を持たせると三十年ぐらゐ生きのびるさうである。

「十五歳にもなれば、まるで置物の羽拔鳥だ。鳥のうちで、壽命の長いのは隼だ。これは百年から百六十年。もつと長いのは鸚鵡だね。どこかのお屋敷には、江戸時代からの鸚鵡が戦争前までゐたさうだ。俺は話に聞いたことがある。」

本當かどうか小鳥屋の親爺さんはさう云つた。

この親爺はチャボの年齢の見分けかたを私に教へてくれた。鳥の脚は鱗で包まれたやうな外見になつてゐる。それがつりとしてゐれば年が若い。ささくれ立つてゐればゐるほど年をとつてゐるさうだ。

私のうちのチャボの脚は、ほんの少しささくれ立つてゐた。卵を産み盛りの年のやうな氣がしたが、一箇月たつても二箇月たつても産まなかつた。うちに三毛猫がゐるためでもなさうであつた。うちの猫は初めのうちチャボを狙つたが、そのつど家内が叱つてゐるうちに、よそのうちの猫が來ると追ひ拂ふやうになつてゐた。晝間は籠のわきでうつらうつらしながら番をして、よその猫が來ると、勢ひよく起きて飛びかかつて行つた。夜は籠を物置に入れるので、よその猫に脅やかされる心配はなかつた。

やつと三箇月ぐらゐたつてから卵を一つ産んだ。小鳥屋の親爺さんが云つてゐたが、チャボや鶏は産みはじめると續いて卵を産むさうだ。明日もまた産むかもしれないと心待ちにしてゐると、その翌日、隣の町内の見知らぬ中年婦人が、バスケットを持つてチャボのことで掛合にやつて來た。

「うちのチャボがお宅に來てゐるさうですから、頂きに參りました。うちで子供のやうに可愛がつてゐました。どうして逃げて來たか知りませんが、八百屋さんで聞いたので頂きに參りました。」

これがその中年婦人の口上である。私はこの口上が氣に入らなかつたが、こんなぶしつけな口がきけるのは實際の飼主であつたせゐだと思つて返してやつた。

婦人はチャボをバスケットに入れると、

「どうも失禮いたしました」と云ふだけで歸つて行つた。

私はこの日を境に、三毛猫だけは本氣で飼つてやらうといふ氣持になつてゐた。

この三毛猫については、數年前にも私は文章に書いたことがある。私のうちに迷ひこんで來て間もないころ、庭さきでこの猫が見事に蝮まじしを退治してくれたので、私は危く蝮に噛まれるところを助かつた。蝮は蛇屋から逃げて來たものだらう。そのころ私のうちの庭さきには、植木屋が刈込んだ木の枝が、柘榴の木の下に一箇月あまりも束ねたまになつてゐた。ある日、それを燃さうと思つて柘榴の木の下に行くと、束ねてある木の枯葉を猫がばさりばさりと手で叩いてゐた。妙なふざけかたをするものだと思つた。

「こら三毛、あつちへ行け。」

私はライターの火を枯葉につけようとした。すると、私が火をつけようとした場所に、一びきの蛇が鎌首を猫に叩かれながら這ひつくばつてゐた。

私は田舎生れだから日本産の青大將と蝮との區別を知つてゐる。色も斑紋も大島緋そつくりのやつが蝮である。こいつの前で輕はずみな舉動をすると飛びついて來る。それが鎌首を猫に叩かれてゐる。私は伸ばした手をそつと引込めて、半ばしやがんだままの姿勢で、そろそろと後にさがつた。

猫は左手と右手で交互に蝮の頭を叩いてゐた。左利き右利きの差別はないやうである。おどけたやうな手つきで左右交互に使つて叩いて行つて、蝮が鎌首を沈めきると、きよろきよとあたりを見まはしてゐる。この隙に、蝮が猫の手をねらつて、さつと鎌首を伸ばす。猫は素早く手を避ける。それも必要以上には引込めない。蝮の口と殆どすれすれの程度に引込める。次に、また左右交互に使つて叩いて行く。蝮が頭を地に着けると手を控へ、蝮が襲つて來ると手を引込める。蝮も猫も同じ仕方で襲撃と逆襲を繰返した。

おそらく猫は蝮の體勢で、どこまで鎌首が伸びるか知つてゐるのだらう。私は猫が勝つと思つたが、大事

をとつて防空演習用の鳶口で蝮の頭を抑へつけた。その瞬間、猫は蝮の首に飛びついて赤肌に剝いだ。目にも止まらぬ早技であつた。

蝮は頭の部分だけに皮を残し、あとはすつかり赤肌で、裏返しに剝けた皮は鞘型の筒になつた。その鞘型の端から、わづかに尻尾の先を、細い舌と同じやうにちらつかせた。猫はそれを嬉しがつて、仰向けに引つくり返つて後脚でからかつた。蝮はもう恥も外聞もない。赤肌剝けの胴體を立てなほして猫の後脚を襲つたが、飛び起きた猫にまたもや叩かれて頭を土に附けた。猫は嬉しさうに引つくり返つて、鞘型の筒先にちらつく尻尾を後脚でからかつた。それを互に同じ遣りかたで何度も繰返した。

最後に猫は蝮の首に噛みついた。この一撃でもう動かなくさせた。私は體ぢゆう青くさくなつたやうな氣がしたので、風呂場に行つて頭から水をかぶつた。出て來て見ると、猫が蝮を啣^{くは}へてどこかへ棄てに行つた後であつた。

それからといふもの私は、うちの猫に對して恩義に似た氣持を感じるやうになつた。抱いたり膝の上に乗せたりすることは一度もないが、相手は動物の直感力によつて私が一もく置いてゐるのを知つてゐるやうである。廊下で日向ぼつこをしてゐるときでも、私がその上を跨ぐやうにして通るのに平然としてゐることがある。

十二年前に孕みの身で迷ひこんだ猫だから、今年は數へ年十三歳以上になるわけだ。猫としては大して年寄とも云へないが、五年前の春お産のとき、一びき産んで二ひき目が出かかつて出なかつた。醫者が來てそれを引張つても、苦しがるだけで出ないから、帝王切開の手術を受けさせた。それから體力も衰へた風で、

盛りがついても孕まなくなつた。魚屋が來ると裏口の聲で臺所へ駈けて行くが、魚の骨をもてあますほど齒の力が弱つてゐる。手術を受けた後で、すぐ盛りがついたのが悪かつたらしい。自制力がないのだから仕方がない。

醫者は猫を病院に連れて行くとき、うちの家内にかう云つたさうである。

「あと二ひき、腹に残つてゐるやうです。もう年寄の猫ですから、切開しても卵巢は残しておきます。生命は大丈夫ですが、今後は雄猫と交渉があつても、すぐ流産するかたちになつて孕まないでせう。」

私はその場にゐなかつたので知らないが、後で家内に聞いた話では、醫者は猫を草取籠に入れて風呂敷に包んで病院に持つて行き、二十四時間たつと同じ籠に入れて持つて來てくれた。籠から出すと、まだ麻酔がきいて三毛はぐつたりなつてゐた。胴體を繯帶されてゐた。お醫者は「炬燵に入れて温かくしてやつて下さい」と云つて歸つて行つた。

一週間に醫者が繯帶を取つてくれた。入院料、帝王切開の手術料、その後の一週間ぶんの往診料、注射代などで合計一萬三千圓であつた。家内は自分の病氣は富山の藥で間に合はすといつたたちだから「うちでは文藝家協會の健康保険に入つてゐるんですけれど」と云つた。すると醫者が、「それはよく存じてをりますが、猫は扶養家族のうちに入らないんでして」と甚だ云ひにくさうに云つた。

しかし家内は、猫がもうお産をしないからほつとしたと云つた。うちの三毛は多産系で、ひところは一年に三回もお産したので子猫の始末に閉口した。それに私のうちは辻道のところにあつて生垣が空いてゐるから、よその人が闇にまぎれて猫の子を垣根のなかに棄てて行く。まだ目のあいてないのを棄てて行く人もあ

る。どうして子猫を引取る商賣の店がないのだらうと、そのつと思はせられることである。

手術を受けてから後は、うちの猫は醫者の云つた通り盛りはついても子を孕まなくなつた。しかし病氣がちで、食べたものを吐いたり鼻汁を出したりして醫者の往診を受けることが多くなつた。今年の春は鼻汁を流す病氣で憔悴した擧句、三日間もどこかに隠れて姿を見せなかつた。もう駄目なんだらうかと噂をしてゐたが、小さな地震があつたので私が庭に出ると、どこからともなく三毛が出て来てしよんぼり敷石の上に坐つた。

先日、齋藤さんの奥さんが久しぶりに見えた。

「うちの猫もだんだん弱りました。年が年ですから。」

と家内が云ふと、

「うちのチャボも、だんだん弱りました」と奥さんが云つた。「もう十一歳のお婆さんですから、せんだつては、卵黄のない卵を産みました。白身ばかりの卵です。」

そのチャボは以前のチャボではなくて、昭和二十三年生れの二代目のチャボである。先代のチャボは、七年前に齋藤さん夫妻の留守の間に亡くなつた。齋藤さんが札幌へビル建築の仕事で出かけたので、奥さんも出かけて行つて建築がすむまで三年間、札幌で一緒に暮してゐた。その留守に先代のチャボは亡くなつたが、齋藤さんのお母さんは倅夫婦が力を落すと思つて知らせなかつた。二代目のチャボもその三年間、一箇も卵を産まなかつた。元氣も悪くなつて雞冠の色もあせてしまつた。しかし齋藤さん夫婦が西荻窪に歸つて來ると翌日から産みだした。留守中、お母さんがチャボを庭へ出してやらなかつたせもある。